

第62回定期演奏会批評

◆東京ニュー・シテイ管弦楽団 第62回定期演奏会

内藤彰指揮でブラームスの交響曲を二曲、第二番二長調と第一番ハ短調の順で演奏した。この指揮者とオーケストラはブルックナーの新版を

積極的に取り上げるなど注目されてきているが、今回は楽譜も新校訂版、演奏スタイルも弦楽器にピリオド奏法を用い、ノン・ヴィヴラートで通すという試みを行った。ブラームスがこれらの曲を作曲した当時の響きを再現しようというものだ。

一聴して、とくにヴァイオリン群のすっきりした透明感に気づかされた。第二番、第一楽章五四小節あたりの弦の重なり合う部分は初めて聴くような新鮮な響きがするし、第一番の冒頭、八分の六拍子の速度をアレグロに設定した結果の風通しの良

さ、第二楽章の独奏ヴァイオリンの素朴な美しさなどは特筆されるだろう。今後、このやり方にオーケストラが馴れ、音楽として成熟することになれば、スタンダードとして確立するのではないかと思った。(5月28日、東京芸術劇場) (保延裕史)